

第17回歴史地震研究会参加記

地質調査所地震地質部* 宍倉 正展

第17回歴史地震研究会は、日本地すべり学会中部支部との共催で、平成12年9月8日から10日にかけて開催された。本研究会は、毎年、歴史的な地震に関連した場所で開催するのが通例であり、今回は1847年善光寺地震で被害に見舞われた長野市で行われた。会場は1日目が長野市山王会館、2日目が長野放送NBSホールで、両会場とも市街中心部の県庁にほど近い場所にある。折しも世間を賑わしたあの長野県知事選挙前だったため、外では政治団体の街宣車が騒々しく走っていたが、会場内は多くの参加者でいっぱいになり、外の喧噪をかき消すくらいの熱気あふれた研究発表会となった。

私自身はこれが初めての参加となる。歴史地震研究会の存在は昔から知っており、興味を持っていたが、地方開催ということもあって、これまでなかなか足を運ばずにいた。今回は自分の研究成果もまとまってきたことから、いろいろな分野の人たちと議論をしたいという思いにかられ、憧れの研究会への第一歩を記すこととなったのである。

1日目の一般研究発表では、さすが歴史地震研究会という感じで、歴史学、考古学、地震学、地形・地質学と多種多様なアプローチによる研究が目白押しであった。しかもいずれも歴史地震という共通のテーマを持っていることから、自分の専門ではない分野の方の発表でも非常に興味深く聴くことができた。これこそが歴史地震学の魅力の一つなのであろう。自分自身の発表でも、期待通り(?)、これまで参加していた学会とは

異なる観点からの様々な意見をいただくことができた。

2日目の午前には、善光寺地震など長野県とその周辺における地震に関する発表があった。今回の研究会を最も特色づけているのがこのセッションで、特に地すべり学会中部支部との共催ということもあり、地震に伴った土砂崩れ、地すべりなど山地崩壊とその被害に関する発表が目立った。内陸県の長野は、津波こそないものの、日本列島の屋台骨とも言うべき山地が連なり、それらを押し上げる役割を果たす断層運動(地震)と安定を保とうと働く侵食作用(崩壊)、そしてこれらに伴う災害など、研究テーマに事欠かないフィールドである。善光寺地震に関する非常に貴重な史料も紹介されていた。

2日目午後は市民講演会として、午前のセッションと同様に、善光寺地震を中心とした長野県の地震について、5人の先生方による講演があった。司会はテレビでもお馴染みの元NHK解説委員の伊藤和明氏である。一般市民の方々を対象としていることから、どの先生方も非常に丁寧でわかりやすく話されていた。特に講演者の1人である元信濃毎日新聞記者の黒岩範臣氏は、まさに一般市民へ情報を伝えるという重要な仕事をされ、専門家以上に地震、活断層のことを勉強し、努力されてきた方である。長野県は日本で最も活動が切迫していると言われる牛伏寺断層をはじめ、多くのA級活断層を有することから、県民の地震に対する危機意識は年々高まりつつあるようである。会

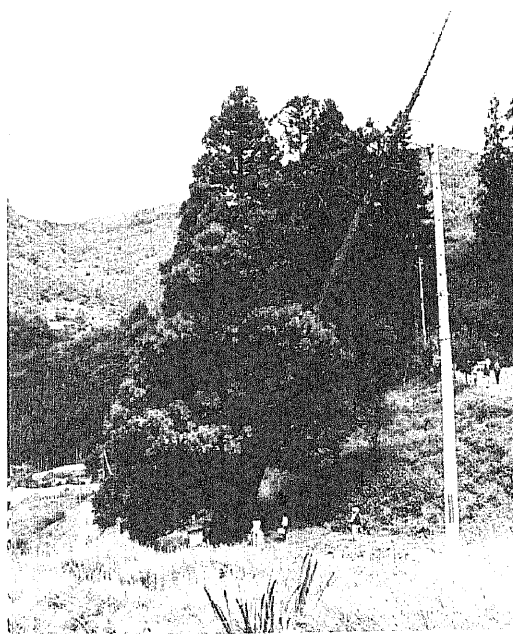
* 〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-3
電子メール: shishi@gsj.go.jp

場では熱心にメモをとる人の姿も見られ、関心の高さが伺えた。

3日目は現地見学会であった。長野市西方の山地における善光寺地震時の土砂災害について、当時の松代藩主・真田幸貫公とお抱え絵師・青木雪卿が地震後に巡視したと言われるコースを、雪卿の描いた絵図と現在の地形観察との比較をしながら巡っていった。地すべりに関しては赤羽貞幸先生（信州大）や井上公夫氏ほか日本工営の方々に案内していただいた。

ジャンボタクシー4台に分乗し、細い山道を縫うように行くと、非常に明瞭な地すべり地形が各所に見られた。驚いたのはそのような地すべりで生じた緩傾斜面それぞれに小さな集落があり、山のかかなり高い位置まで点在していることであった。「ここの人々はどうやって暮らしているのだろうか」と車内では善光寺地震とは関係ない話題で暫し盛り上がってしまった。肝心の雪卿の絵図との比較では、現在の地形からも当時の様子を十分伺い知ることができた。これらの地すべり地は今後も動く危険性があるが、味大豆地すべり地では、日本工営による自動観測システムが作動しており、地下水位や地中の歪みなど刻々と送られてくるリアルタイムの観測結果を見せていただいた。

念仏寺村の臥雲院という由緒あるお寺では、臥雲の三本杉という立派な古木が見られた。これは善光寺地震時にお寺の山門付近から立ったまま180mもすべり下ったものと言われ、現在も山側へ傾いたままの状態です。当時の状況を生々しく伝えている。このほか、崩壊土砂の堰止めによる湖などを観察し、地すべり三昧の見学会は夕方、長野駅で解散となった。



臥雲の三本杉

1つの幹から3本に分岐し、うち2本が傾く

前述のとおり、私は今回が初めての参加であったが、学際的でかつアットホームな雰囲気、非常に気に入ってしまった。2日目終了後の総会では、歴史地震研究会の今後について、今までの同好会的なものから、きちんとした組織として運営していくことが話し合われた。歴史地震研究の発展のためには、会の基盤をしっかりとし、より多くの人々の参加によって互いに刺激しあえることが望まれる。しかしながら、現在のような肩肘張らず、自由に発言できる雰囲気も失わずにいて欲しいと、勝手ながら願っている。

最後に、今回の研究会のために企画から準備、運営された方々、また見学会で現地を案内していただいた方々に心より感謝申し上げます。